事例２　『源氏物語』を教材としたアクティブ・ラーニング型の授業例
～　ジグソー学習の手法を取り入れた授業展開　～

１　学習活動の概要

(1) 教材　物語『源氏物語』より「光源氏誕生」（古典Ｂ）

(2) 単元の目標

・古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしようとする。（関心・意欲・態度）
・古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。（読む能力）
・古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解する。（知識・理解）

(3) 取り入れる言語活動

資料から読み取ったことや資料について調べたことを伝え合い、議論することを通して課題について考察する。

(4) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
登場人物の感情や宮中の人間関係を的確に読み取り、文章中の人物の人間、社会、自然などに対する感情について考察しようとしている。	登場人物の感情や宮中の人間関係を的確に読み取り、文章中の人物の人間、社会、自然などに対する感情について考察している。	本文の読解に関わる古文単語、文法事項、敬語表現を理解している。

(5) 指導と評価の計画（全７時）

次	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
１【１時間】	**●源氏物語の概要を捉える。** (1)源氏物語についての説明を聞く。	○国語便覧を活用する。	
２【４時間】	**●本文の内容を把握する。** (1)本文を音読する。 (2)現代語訳をしながら内容を把握する。	○主語を補いながら現代語訳を考えさせる。 ○人物関係について把握させる。 ○作品の背景についても便覧を使いながら適宜説明する。	**読む能力** （本文の読解に関わる古文単語、文法事項、敬語表現を基にして、桐壺の更衣を取り巻く人々の感情や、宮中の人間関係を的確に読み取っている。） 行動の確認 **知識・理解** （本文の読解に関わる古文単語、文法事項、敬語表現を理解している。） 行動の確認

3 【 2 時 間 】	**●「桐壺の更衣を死に追い詰めたのは誰か」について考察する。【ジグソー学習】** (1)桐壺の更衣が実家に戻り亡くなる場面の説明を聞く。 (2)「桐壺の更衣を死に追い詰めた一番の原因となったのは誰か」を個人で考える。 (3)以下のA～Dのグループ（エキスパート班）に分かれ、自分達が担当する人物が桐壺の更衣のことをどう思っていたのか、また、桐壺の更衣に対してどのようなことをしたのかを考える。 A　帝 B　弘徽殿の女御 C　女御・更衣たち D　上達部・上人 (4)A～Dのそれぞれを担当していた４人でグループ（ジグソー班）を組み、各自が学習してきたことを伝え合う。 (5)「桐壺の更衣を死に追い詰めた一番の原因となったのは誰か」「四者の弁解の余地」についてグループで議論する。 (6)各グループごとに議論の結果を発表し、それをもとにクラスでクロストークをする。 (7)「桐壺の更衣を死に追い詰めた一番の原因となったのは誰か」を個人で再考する。	○各グループに、それぞれの資料を配付する。 ○資料に不明な点がある場合や、その他の情報についても詳しく調べたい場合には、タブレット端末、日本史や世界史の資料集などを使って調べさせる。 ○資料から読み取ったことや資料について調べたことはワークシートにまとめさせる。 ○エキスパート学習でまとめたワークシートを参考にさせる。 ○ワークシートにまとめさせる。	**関心・意欲・態度** 桐壺の更衣を取り巻く人々の感情や宮中の人間関係について、互いに伝え合ったことや議論したことを踏まえ、考察しようとしている。 行動の確認 **読む能力** 桐壺の更衣を取り巻く人々の感情や宮中の人間関係について、互いに伝え合ったことや議論したことを踏まえ、考察している。 生徒による記述の分析

２　授業の様子

【第１次】　源氏物語の概要を捉える。

ここは１時間をかけて展開した。

前単元で学習した『更級日記』に登場した「少女」が『源氏物語』に対する憧れの気持ちを抱い

ていたことを思い出させながら、国語便覧を使い、『源氏物語』のあらすじや時代背景について説明した。

【第２次】　本文の内容を把握する。

ここは４時間をかけて展開した。

主語を補いながら現代語訳を考えさせることを通して、本文の内容を把握させた。また、「一の皇子（弘徽殿の女御の子（朱雀帝））」と「玉の男皇子（光の君）」それぞれに対する帝の想いを比較させ、皇子達それぞれの後ろ盾を含めた人間関係も把握できるように配慮しながら読解を進めた。

【第３次】　「桐壺の更衣を死に追い詰めたのは誰か」について考察する。【ジグソー学習】

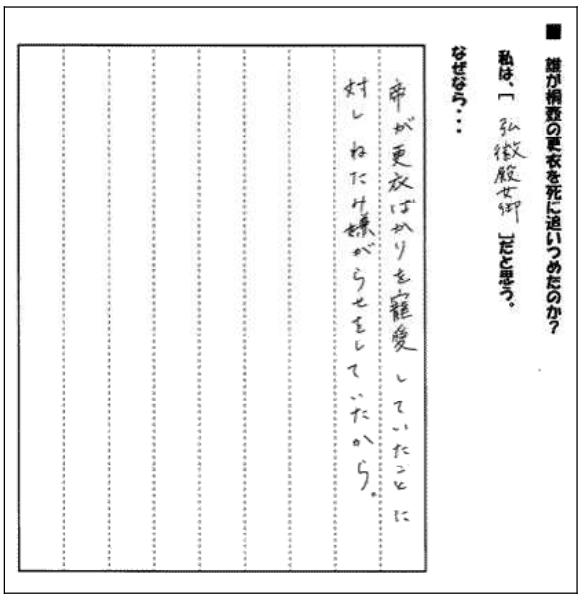
ここは２時間をかけて展開した。

〔第１時〕

まず、源氏が３歳のときに母親である桐壺の更衣が亡くなった経緯について、該当箇所の『源氏物語』本文と現代語訳を併記したプリントを使い、簡単に説明した。

その後、「桐壺の更衣を死に追い詰めた一番の原因となったのは誰か」という問いを示し、ワークシート①に自分の考えを記入させた。生徒からは、「帝」「弘徽殿の女御」「女御・更衣たち」「光源氏」「桐壺の更衣の親」などが挙がった。

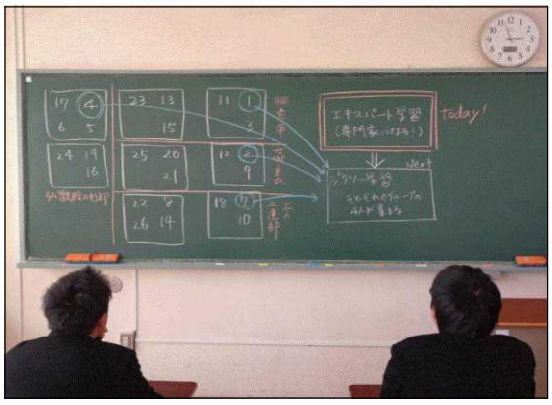
次に、エキスパート学習を行った。生徒を、帝担当グループ（A）、弘徽殿の女御担当グループ（B）、女御・更衣たち担当グループ（C）、上達部・上人担当グループ（D）の四種のエキスパート班に分け、各グループごとに、次頁に挙げた資料（該当箇所の本文と現代語訳を併記したもの）を配付した。そして、これらの資料から読み取ったことを基にして、自分たちが担当する人物が桐壺の更衣のことをどう思っていたのか、また、桐壺の更衣に対してどのようなことをしたのかを考えさせた。



ワークシート①



ワークシート①に考えをまとめる



ジグソー学習の流れを示し、生徒に学習の見通しをもたせる

帝担当グループに配付した資料の内容
（『源氏物語』桐壺巻より）

桐壺の更衣がふとした病気をなさり、実家へと退出なさろうとするが、帝は「なほしばしこころみよ」と、なかなか実家に下がることを許さない。五、六日の間に病は悪化し、桐壺の更衣の母が泣く泣く帝に奏上したため、帝が宮中からの退出を許しなさった場面。

弘徽殿の女御担当グループに配付した資料の内容
（『源氏物語』桐壺巻より）

帝は、桐壺の更衣の死後も四十九日までの法事を丁寧に執り行いなさる。女御・更衣たちの夜のお仕えも遠ざけなさって、毎日涙を流しなさる。その一方で、弘徽殿の女御は帝の様子を見て、「亡き後まで人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」と相変わらず容赦なくおっしゃる。弘徽殿の女御は桐壺の更衣の死後も嫉妬心をあらわにしていたことが推し量れる場面。

女御・更衣たち担当グループに配付した資料の内容
（『源氏物語』桐壺巻より）

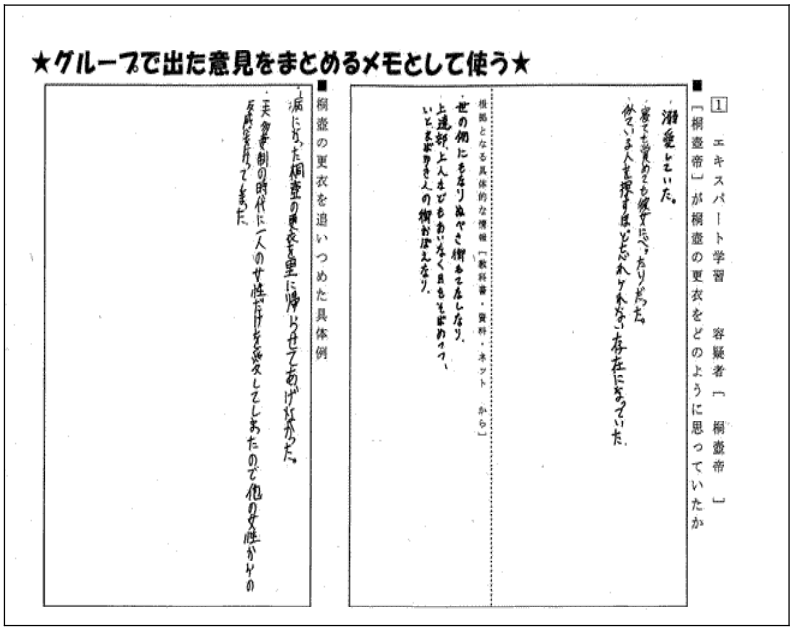
帝がたくさんの女御・更衣たちを素通りなさり、桐壺の更衣のもとに足繁くお通いになるので、女御・更衣たちは、「あやしきわざ」をしては、桐壺の更衣の着物の裾を汚したり、馬道の戸を閉めて桐壺の更衣を閉じ込めたりと、数え切れないほどのいじめを繰り返す。見かねた帝は、後涼殿のお部屋を桐壺の更衣にお与えになるが、その他の更衣たちの恨みは晴らしようがないのであるという場面。

上達部・上人担当グループに配付した資料の内容
（白居易「長恨歌」より）

玄宗皇帝は楊家の美しい娘を妃として迎える。それ以降、天子は朝早く起きて政治の仕事をすることがなくなってしまう。さらに天子は、宮中の他の女性たちに見向きもしなくなってしまう。三千人の寵愛が一人に集中してしまったのである。しかしながらあるとき、反乱が起き、皇帝の住まいにまで危険が迫ることとなる。急ぎ天子は都から逃げ出すが、思うように進めず、とうとう兵士まで皇帝の言うことを聞かなくなってしまう。そして、楊貴妃は天子の前で殺されてしまうという場面。

これらの資料について不明な点がある場合や、その他の情報についても更に詳しく調べたい場合には、タブレット端末、日本史や世界史の資料集を使って調べさせた。ただし、インターネットで調べる際には、ウィキペディアやブログのような書き手の匿名性が強いWEBページからの情報の取扱いに注意させた。

資料から読み取ったことや資料について調べたことは、ワークシート②にまとめさせた。その際、記入した内容が、配付した資料からまとめたものなのか、インターネットで調べたことからまとめたものなのかの区別ができるよう、それぞれ色の違うペンで書くように指示を与えた。

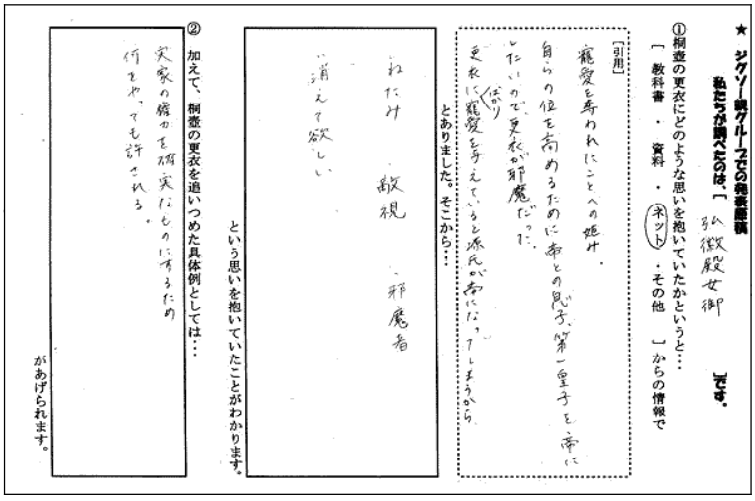


ワークシート②

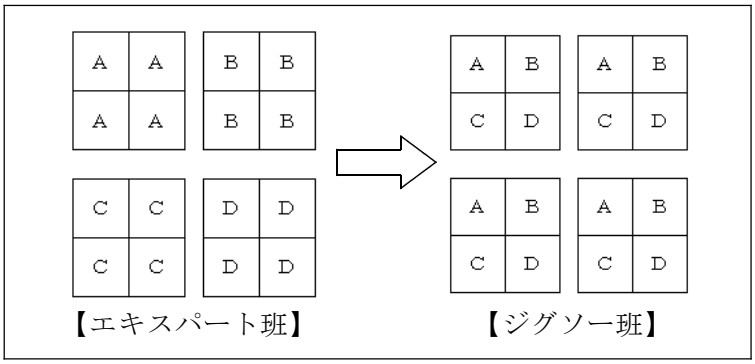
帝担当グループ（A）、弘徽殿の女御担当グループ（B）、女御・更衣たち担当グループ（C）は、配付

資料や日本史・世界史の資料集、タブレット端末を使いながら、おおむね順調に学習を進めることができた。一方、上達部・上人担当グループ（D）は、配付資料が長恨歌の一部分であり、上達部・上人が桐壺の更衣に対してとった言動が書かれているものではなかったため、始めのうちは苦戦していた。そこで、教師がグループを回りながら、上達部・上人担当グループを重点的に指導した。

活動に目処のついたグループから、次時の学習で使うワークシート③を記入させた。



ワークシート③



エキスパート班からジグソー班に組み直す

〔第２時〕

エキスパート学習でそれぞれ違う人物を担当した４人でグループ（ジグソー班）を組み直した。

まず、ワークシート③を使いながら、自分が担当した人物が桐壺の更衣のことをどう思っていたのか、また、桐壺の更衣に対してどのようなことをしたのかを伝え合わせた。

次に、それぞれが伝え合った内容を加味した上で、「桐壺の更衣を死に追い詰めた一番の原因となったのは誰か」、また、「『帝』『弘徽殿の女御』『女御・更衣たち』『上達部・上人』それぞれの弁解の余地」についてグループで議論をさせた。

その後、各グループごとに、自分たちが議論した内容を発表させ、クラスでクロストークを行った。

四者の弁解の余地については、以下のような意見が出た。

帝の弁解の余地

・帝は宮中での権力関係にうんざりしていたのではないか。宮中での生活に閉塞感を感じていたことも考えられる。だから、愛する女性を得て歯止めがきかなくなってしまったのではないか。
・恋する気持ちはどうしても止めることができないものだと思う。

弘徽殿の女御の弁解の余地

・自分が一番先に入内したのに、後から入内した桐壺の更衣に帝の寵愛をもっていかれてしまい、おもしろくなかったのだと思う。
・右大臣家に生まれ育ち、高いプライドがあるだけに、自分より格下の桐壺の更衣に負けることが許せなかったのだろう。

女御・更衣たちの弁解の余地

・桐壺の更衣が自分よりも身分が低いから、あるいは自分と同じくらいの身分だからこそ、その更衣に帝の寵愛を独占されたことが悔しかったのではないか。
・実家の権力の維持と繁栄のためにも、帝の寵愛を得たいと思って必死だったのではないか。

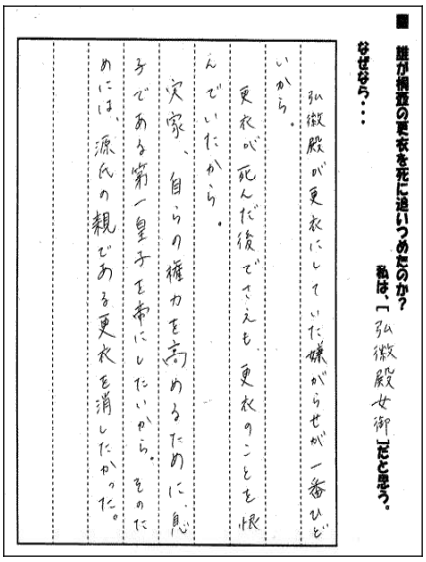
上達部・上人の弁解の余地

・一人の女性に入れ込んで政治を怠る帝に対し、しっかりしてほしいと思うのは、役人として当然なのではないか。また、中国でのように世が乱れるのも困る。だから、帝や桐壺の更衣に対して冷ややかな態度をとってしまうのは、仕方なかったと思う。

クロストークの後、「桐壺の更衣を死に追い詰めた一番の原因となったのは誰か」という問いを個人で再考させ、ワークシート④に記述させた。

以下に挙げるのは、第３次の初めに生徒が書いたワークシート①と第３次の最後に生徒が書いたワークシート④を比較したものである。ここから、それぞれの生徒の考えがどのように変化したのかが分かる。

生徒Ａ、生徒Ｂは、主にエキスパート学習での内容を踏まえて人物像をふくらませ、課題について深く考察することができている（実線）。また、生徒Ｃは、ジグソー班やクラスでのクロストークでの議論を経て、自分なりの考察を深めていることが分かる（波線）。生徒Ｄ、生徒Ｅは、他者の意見を取り入れながら（波線）、自分のエキスパート学習での成果（実線）を踏まえて考察を深めることができている。いずれの生徒の見解も、ワークシート①よりワークシート④の方が、内容がより充実していることが分かる。


誰が桐壺の更衣を死に追いつめたのか？
私は、「弘徽殿女御」だと思う。
なぜなら・・・
弘徽殿が更衣にしていた嫌がらせが一番ひどいから。
更衣が死んだ後でさえも、更衣のことを恨んでいたから。
実家、自らの権力を高めるために息子である第一皇子を帝にしたいから。そのためには、源氏の親である更衣を消したかった。

ワークシート④

生徒Ａ（エキスパート学習では弘徽殿の女御を担当）

桐壺の更衣を死に追い詰めたのは
→弘徽殿の女御
〔理由〕
帝が桐壺の更衣ばかりを寵愛していたことに対してねたみ、嫌がらせをしていたから。

ワークシート①

桐壺の更衣を死に追い詰めたのは
→弘徽殿の女御
〔理由〕
弘徽殿の女御が桐壺の更衣にしていた嫌がらせが一番ひどいから。桐壺の更衣が死んだ後でさえも、更衣のことを恨んでいたから。実家、自らの権力を高めるために息子である第一皇子を帝にしたいから。そのためには、源氏の親である桐壺の更衣を消したかったのだと思う。

ワークシート④

生徒Ｂ（エキスパート学習では上達部・上人を担当）

桐壺の更衣を死に追い詰めたのは
→（記述なし）
〔理由〕
（記述なし）

ワークシート①

桐壺の更衣を死に追い詰めたのは
→上達部・上人
〔理由〕
玄宗皇帝は楊貴妃を寵愛しすぎて政治を怠り、貴族の不満が高まって安史の乱が引き起こされた。それによって楊貴妃は殺された。このことを源氏物語で置き換えると、帝は桐壺の更衣を寵愛しすぎて政治を怠ったために、上達部や上人は、「楊貴妃の例も引き出でつつ」というような態度をとるようになり、その結果、宮中には帝や桐壺の更衣に対する「見えない包囲網」ができたのではないか。こう考えると、桐壺の更衣を死に追い詰めたのは、そのような宮中の雰囲気をつくった上達部・上人だと思う。

ワークシート④

生徒C（エキスパート学習では上達部・上人を担当）

桐壺の更衣を死に追い詰めたのは
→帝
〔理由〕
帝が桐壺の更衣を寵愛しすぎたために、周囲の女御たちの妬みを買うことになってしまったから。

ワークシート①

桐壺の更衣を死に追い詰めたのは
→帝
〔理由〕
桐壺の更衣を寵愛しすぎてしまったから。それにより、桐壺の更衣は女御・更衣たちの反感を買ってしまい、精神的にも肉体的にも追い詰めてられてしまった。帝が桐壺の更衣を寵愛しすぎなければ、女御・更衣たちの反感を買うこともなく、政治を心配した上達部・上人から冷ややかな態度をとられることもなかったに違いない。

ワークシート④

生徒D（エキスパート学習では弘徽殿の女御を担当）

桐壺の更衣を死に追い詰めたのは
→帝
〔理由〕
帝は右大臣の娘の弘徽殿の女御をさしおいて、桐壺の更衣を御寵愛しすぎた。それが原因で桐壺の更衣は憎まれ、死に追いやられた。

ワークシート①

桐壺の更衣を死に追い詰めたのは
→弘徽殿の女御
〔理由〕
帝が桐壺の更衣を過度に寵愛したことが原因で、他の女性たちからのいじめが起こるようになったのだが、やはり愛というのは仕方がない。しかし、それが桐壺の更衣を死に追い詰めたとは言い難い。やはり、そのいじめのリーダー格である弘徽殿の女御が死に追い詰めた一番の人物であると考えられる。

ワークシート④

生徒E（エキスパート学習では帝を担当）

桐壺の更衣を死に追い詰めたのは
→桐壺の更衣の親
〔理由〕
入内しなければ、桐壺の更衣は帝と会うこともなく、他の女御・更衣たちに妬まれることもなかった。入内したことによって、桐壺の更衣は悩むことになり、病に倒れ、死ぬことになったと思うから。

ワークシート①

桐壺の更衣を死に追い詰めたのは
→帝
〔理由〕
他の女御・更衣に嫉妬されたり、嫌がらせをされたりしたことで桐壺の更衣は精神的に追い詰められていったが、そのような事態を引き起こした元々の原因が帝にあるから。帝は桐壺の更衣の身分も分かっていながら、自分の一方的な思いばかりをぶつけ、桐壺の更衣を悩ませた。また桐壺の更衣が病になった際も、自分のことばかりを考え、実家に帰らせず、気を休めてやらなかった。帝の自分勝手で行き過ぎた愛が、桐壺の更衣を死に追い詰めた一番の原因だと思う。

ワークシート④

また、以下に挙げるのは、今回の授業に対する生徒の所感である。

(a)桐壺の更衣など全然気にもしなかったけれど、この学習を通して、源氏物語に興味をもち少し読みたくなりました。
(b)桐壺の更衣を死に追い詰めた人を探すために彼女の周囲の人々についても詳しく学習したので、作品中の人間関係や、人物それぞれの思惑をより深く理解することができた。
(c)登場人物それぞれの心情を知り、物語の内容もより深く知ることができた。
(d)「長恨歌」を読んだことによって、教科書の本文中で表現されていたことがはっきりと分かり、読み深めることができた。
(e)グループのメンバーからの話を聞いて、自分が考えていたのとは違う意見が出たときは、「なるほど。そういう見方もあるのか。」と思った。違った視点で読み深めることができた。
(f)今回の学習で、桐壺の更衣を死へと追い詰めた主な原因は弘徽殿の女御であると考えたが、桐壺の更衣は、帝からの御寵愛もプレッシャーだったと思う。いろんな面からの圧力に耐えられなかったのだろう。
(g)現代も昔も人々の思うことは似ていると思った。
(h)一夫多妻制は夫がうまく対応しないと大変なことが起こる。女性は恐い。

(a)からは、作品への興味関心の高まりが見て取れる。(b)(c)(d)からは、作品そのものへの理解が深まった（実線）ことが見て取れる。(e)(f)からは、他者との交流により、自分が気付かなかった点に気付き、課題への考察を深めている（波線）ことが分かる。(g)(h)からは、古典作品をより自分に身近なものとして捉えることができていることが分かる。

3　評価の例

読む能力の評価は、主に第２次と第３次に行った。第２次においては、「本文の読解に関わる古文単語、文法事項、敬語表現を基にして、桐壺の更衣を取り巻く人々の感情や、宮中の人間関係を的確に読み取っている」ことを評価規準として、生徒の発言や学習の様子を確認することで評価した。「努力を要する」状況（Ｃ）と判断した生徒には、敬語表現を手がかりにして主語を考えさせたり、読解のポイントとなる文法事項に気付かせたりするといった手立てを個に応じて行った。第３次での読む能力の評価は、この単元における読む能力の主とする評価として行った。「桐壺の更衣を取り巻く人々の感情や宮中の人間関係について、互いに伝え合ったことや議論したことを踏まえ、考察している」ことを評価規準として、生徒が書いたワークシート①とワークシート④の記述を分析することで評価した。Ｐ28～29に挙げた第３次２時での生徒Ａ、Ｂ、Ｃの記述例のように、エキスパート学習やクロストークの内容を踏まえて自分なりの考察を深めている生徒を、「おおむね満足できる」状況（Ｂ）と判断した。また、Ｐ29に挙げた第３次２時での生徒Ｄ、Ｅの記述例のように、多角的な視点から自分なりの考察を深めている生徒は、「おおむね満足できる」状況（Ｂ）の中でも優れていると判断し、事例実践校においては「十分満足できる」状況（Ａ）と見なした。

知識・理解の評価は主に第２次に行った。「本文の読解に関わる古文単語、文法事項、敬語表現を理解している」ことを評価規準として、生徒の発言や学習の様子を確認することで評価した。「努力を要する」状況（Ｃ）と判断した生徒には、敬語表現や読解のポイントとなる文法事項を辞書や文法書で確認させるといった手立てを個に応じて行った。

関心・意欲・態度の評価は主に第３次に行った。「桐壺の更衣を取り巻く人々の感情や宮中の人間関係について、互いに伝え合ったことや議論したことを踏まえ、考察しようとしている」ことを評価規準として、グループやクラスでの生徒の議論の様子を確認することで評価した。また、エキスパート学習で学んできたことの伝え合いを踏まえて、人物の感情を推測したり人物それぞれの弁解の余地を想像したりして、積極的に意見を出して議論を進めようとしている生徒は、「おおむね満足できる」状況（Ｂ）の中でも優れていると判断し、事例実践校においては、「十分満足できる」状況（Ａ）と見なした。

４　成果と課題

〔成果〕

・生徒は、思考を深めるのに役立つ知識を伝え合い、それを踏まえて、各自で課題について考察することができた。第３次の初めに生徒が書いたワークシート①と第３次の最後に生徒が書いたワークシート④を比べると、ワークシート④では、エキスパート学習やクロストークの内容を踏まえて考察が深められているものが目立った。

・課題に対する自身の見方を形成するのに役立つ知識を学習させた上で、互いの見解を交流させたことは、より多角的な視点からの考察を実現させる上で効果的であったと考える。

・今回の学習については、生徒自身もＰ30に挙げた「所感」のように、自身の思考や作品に対する理解の深まり、また、他者と交流する学習の意義を自覚している。ちなみに、授業前と授業後に行った授業に対するアンケート（生徒50名対象）を比較すると、以下のような結果であった。ここからも、他者と交流する学習の意義や効果を生徒自身が実感していることが分かる。

・「友人と意見を交換することが有意義か」という質問に対して、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と答えた生徒が【72%→80%】と上昇した。
・「ジグソー学習を通して、友人の見解を踏まえ、深く考察することができたか」という質問（授業後アンケートにのみ設けた質問）に対し、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と答えた生徒の割合は92%であった。

〔課題〕

・今回のエキスパート学習に配付した資料は、「帝」「女御・更衣たち」「弘徽殿の女御」担当グループと「上達部・上人」担当グループとでは、内容のレベルに差があった。一見、課題との関わりが薄いように感じられる資料を配付した「上達部・上人」担当グループには、配付資料と本文との関わりを示す「楊貴妃の例も引きいでつつ」などの表現に着目させるなどして、生徒が課題に迫るための支援をもう少し手厚くしても良かった。

事例２のポイント

１　思考力を育成するための工夫

事例２では、思考力を育成するための工夫として、生徒がものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりしていける学習場面を設定した。

具体的には、生徒各自がエキスパート学習で学んできた内容をジグソー班で伝え合い、議論することを通して、課題について考察することを求めた。交流を通して自身の見方を豊かにし、そこからより高次な思考を形成させていくために、インフォメーションギャップを利用して生徒同士の考えを交流させる仕掛けとして、また、より高次な思考を形成していくのに役立つ知識を学習させる仕掛けとして、ジグソー学習の手法を取り入れている。

２　その他のポイント

(1) ジグソー学習

ジグソー学習を行う大前提は、「この授業における学習のねらいを達成さるには、ジグソー学習を行うことが効果的である」という教師の判断があることである。その上で、ジグソー班での学習課題とエキスパート班での学習課題を適切に設定することが求められる。特に、知識構成型ジグソー法について言えば、エキスパート班で学習する課題については、その学習の結果がジグソー班で探究する課題の解決につながるものでなければ、ジグソー学習が効果的に機能するとは言いがたい。

事例２では、エキスパート学習での課題（「帝」「弘徽殿の女御」「女御・更衣たち」「上達部・上人」は桐壺の更衣のことをどう思っていたのか。また、桐壺の更衣に対してどのようなことをしたのか。）に対する「解答」が、ジグソー班で探究する課題（「桐壺の更衣を死に追い詰めた一番の原因となったのは誰か」）に対する自分の見方を形成するためのヒントになっている。

(2) インターネットを用いた調べ学習の指導

インターネットを用いて調べ学習を行う場合には、どのWEBページへのアクセスを認めるかについて、授業者に判断が求められる。書き手が「明確なもの」と「そうでないもの」も含めて、調べ学習に便利なWEBページは多い。このため、授業者は、調べ学習を行う目的に留意し、どのWEBページを参考資料としてよいのかについて判断することが求められる。

事例２の調べ学習に関しては、授業者は、生徒が調べ学習を通して「帝」「弘徽殿の女御」「女御・更衣たち」「上達部・上人」について正確に把握し、そこで得た知識をその後の古典の学習にも生かしていくことをねらっている。このため、ウィキペディアやブログのような書き手の匿名性が強いWEBページからの情報は、そのまま鵜呑みにして活用するのではなく、記載されている内容の妥当性について複数のWEBページをあたって判断した上で活用するように指導した。